「いのち主義」の時代的背景とその展望

上　田　紀　行

1980年代、日本で展開した、「いのち」への関心、森岡正博が「80年代生命主義」と呼ぶこの流れは、いかなる時代的背景を持って生まれたものであろうか。

本報告では、それを人類史における20世紀という時代の異常性と、現代日本におけるアイデンティティー危機という両面から捉えて、「いのち主義」の求めるものをその中に位置づけるとともに、その21世紀に向けての展望を明らかにしたい。

1．20世紀の「異常性」

80年代「いのち主義」は、単に80年代日本社会をその背景に持つだけではなく、20世紀という時代がこれまで進んできた方向に対する、根本的な疑義と、それへの不安をその背景に持っている。

人類史的に見れば、20世紀は地球大の破壊と暴力の時代であり、前代未聞の「異常」な時代だったといえるだろう。

もちろん人間社会のある部分だけを取り出してみれば、20世紀は科学技術の進歩発展の偉大な世紀でもあり、輝かしい「近代」化の世紀でもあり、「豊かさ」の増大の時代でもあった。1960年代頃は、漠然とこの社会はどんどんいい方向、豊かな方向へと向かっていくように感じられたものだ。しかしその幻想は1970年代には既に息切れを見せるようになった。それに代わって、1980年代には地球の危機が取りざたされるようになり、そして21世紀まであと5年という現在、われわれはこの世紀を総括し、次の世紀の新しいパラダイムを創造しなければどうにもならないと感じている。たかだか40年という短期間に我々の意識はひとつの極からもうひとつの極へと大きく振れ、この世紀末に至って、20世紀の単なる延長が輝かしい未来をもたらさないことが共通認識として共有されるに至ったのである。

確かに、もしわれわれが月にいて、そこから地球という星を定点観測しているような立場だとしたら、この100年間にこの星に起こった変化はかなり痛々しいものに見えることだろう。

例えば人口の増加を見てみよう。そもそも人類が地球上に姿を現したのがおよそ400万年前だといわれている。そして推計では、100万年前の世界人口はおよそ100万人だった。それが1万年前、つまり農耕が始まる時点で1000万人に増加する。10倍になるのに100万年かかったわけである。その人口は西暦元年にはほぼ1億人となる。この間の人口増加率は100年間で